

---

# **T h E .w o R L d .W A r**

ポッパ-佐藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE・WORLD・WAR

### 【Nコード】

N3012G

### 【作者名】

ポッパ―佐藤

### 【あらすじ】

10年前侵略者たちとの戦争は終わったはずだった。平和になったはずだった。しかし、突然で必然的に戦争が血と炎と狂気にまみれ再燃する。引退した英雄、その教え子、戦友、人間、侵略者、全てが混沌とした世界の中で誰が死に誰が生きるのか。真実を暴くのは誰なのか？

The Girl Who Dances like crazy (前書き)

なんとか完結を目指して頑張りたいと思います。

The Girl Who Dances Like Crazy

赤、赤、赤、赤。  
青、青、青、青。

世界は変わる。  
みんな変わる。

青、蒼、アオ、あお。  
赤、紅、アカ、あか。

なのに私は変われない。  
ここで死ぬまで踊るだけ。  
そんなのやだ。いやだ。  
だったらみんなも踊ればいいんだ。  
踊って踊って踊って踊って死ねばいい。  
みんなみんな私と踊ろう。  
私と死のう。

## 序章 1 / 1

「よお先生、十年ぶりの現場復帰だ。ぜひ感想を聞かせてもらいたいね」

「感無量だ」

暗闇の中で一人の男が立ち上がる。剥げた屋根から差し込む月光が、あたりを青白く染め上げている。

「さつさと任務の内容を言え」

男は錆びて原型がわからない機械が転がっている中、とりわけ大きいクレーンのついた黒い塊を横目で睨みながら闇夜に向かって咳く。

すると足元からダンゴムシそっくりの拳二つ分の機械がころころと転がってきた。男の足に当たると、飛び跳ねて空中で伸びる。正体をあらわしたそれは、ダンゴムシではなくアルマジロに近いものだった。

「悪いね、取りあえずは自己紹介だ。俺はウォルト中身はオスだがこいつは雌型。お食事中呼び出してすまなかつたね。今からあんたのことは先生って呼ぶから、これコードネームね」

「任務の内容は」

雌型ロボットから聞こえる機械音声に、男は再び繰り返す。

「噂どおり生真面目な人間だな。まあいいや、あんたを引っ張り出してきたのはあんたの生徒さんが、文字通りドジッて『やつら』を取り逃がしたからだ。ここに潜伏してるのを発見したんだが一番近いのがあんたの隠れ家だったってわけだ」

男はサングラスを装着しながら、先を続けるように合図する。

「いまからこの工場の奥にいるやつに一発ぶち込んで、弟子の汚名をそそいでくれ」

「了解だ。探す面倒もはぶけたしな」

は？ と機械から間拔けな声が聞こえると同時に、男は横っ飛びする。今男がいた場所めがけて、あの巨大なクレーンが倒れこんできた。ほんの少し遅かったら今頃、内臓をぶちまけていただろう。

「バレてんだ。バカ野郎」

舌打ちしながら男は物陰に隠れる。ウォルトは一呼吸置いた後、男の懐に飛び込んだ。

「いつからだ」

「お前がころころ転がってきたときだ」

「そりゃ失敬」

言うやいなや緑色の閃光が機械を貫通して、男の耳元を通り過ぎて行く。

「敵さんは侵略者インベーダーの残党らしいが、この熱量はイーグルだな。なかなかの重装備でいらっしゃる」

おもしろそうに言うウォルトを一瞥すると、男は黙ったまま腰を落としたままゆっくりと移動し始める。ウォルトもそれに続いた。

不気味なほどの静寂が辺り一帯を包んでいた。数キロ離れたところに世界一の避暑地とギャンブルの街が広がるとはとも思えない。男はゆっくりと腰につけたハンドガンらしきものを手にし安全装置をはずす。

「おいおいエリックなんかじゃイーグルに勝てないぜ」

静かな声で文句を言うアルマジロを無視し、男はそつと機械の間から前方を除く。わずかな光を数十倍も明るく調節できる機能があるサングラスを通すと、二階の階段付近に大口径のライフルを構える異様な『敵』の姿がはっきりと確認できる。

こちらの位置を完全には把握できていない様で、数百ある目が四方八方にうごめいていた。

拳の上に銃身をおいてゆっくりと、構える。

「バカなまねするな。この位置じゃあたらないし、エリックなんかの熱量じゃ致命傷は無理だ。俺らの場所がばれちまう」

「うるさい。その口を閉じてろ」  
言いながら、男は『敵』の真上めがけて数発トリガーを引いた。  
赤色の閃光が、天井に不安定にぶら下がっている巨大な鉄骨の残骸を打ち抜く。衝撃に耐えられなくなった鉄骨は、敵の頭の上に落下し二階の床ごとその全身を地面に叩き付けた。なにかがはじける嫌な音が地面を揺らす轟音に混じり聞こえ、またすぐに廃工場は静寂に戻った。

タバコを吸いながら工場から出て行く男にころころと隣をを転がるアルマジロが、のんきに話しかける。

「先生報告しといた。本部は大喜びだ。ついでにあんたに現職復帰を希望しているって」

「遠慮しておく」

「だろつとおもったさ」

草陰に置いてあるものを男が引っ張り出すと、ウォルトが大声を上げた。

「おいおいそりゃなんだ！ まさか自動二輪とかいうやつか」

「まあな」

「先生は本当に変わってるな。まさか今時タイヤ付きに乗ってるやつにお目見え出来るなんて思いもしなかったぜ」

大げさに飛び上がるアルマジロを後ろに乗せて、男はエンジンをかける。暗闇と静寂を小気味いいエンジン音が響いた。

一人と一機は草道を街めがけて突っ走っていった。

その途中、ウォルトが口を開く。

「言いたかないけど、先生に悪いお知らせがある」

男は黙ったまま前を向いている。草道はいつの間にか整備されたアスファルトに変わっている。高台になるそこから、街を一望できる。

「俺も信じたくないんだが、それに正直混乱してる。わかるだろ？」

「……ああ」

「言わなきゃならねえな。まあそれが俺の仕事なわけだし」  
生ぬるい風が、街のほうから吹き抜けてくる。その風に微かに嫌  
なにおいが混ざっていた。

男はじつと眼下に広がる再興と平和の象徴の街を見る。

「0056時。世界の主要都市で大規模なテロが発生」  
血と人肉が焦げる臭いが、吹き上げてきた。

「あんたの街も対象だ。先生、あんたに勅令が来てる」  
声にならない悲鳴が聞こえた気がした。

「至急ハナジリの支部と合流するように、とのことだ」  
男は何も言わずエンジンをかけ、赤色に激しく燃える街へとその  
身を放り込んでいった。

これが全てのはじまりだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3012g/>

---

The.worLd.WAr

2010年10月9日21時59分発行